

**全国の男女 1000 名に聞いた
『余命が限られた場合、どのような医療を受け、どのよう
な最期を過ごしたいか』**

日本ホスピス・緩和ケア研究振興財団(理事長 柏木 哲夫)では、全国の男女 1,000 名を対象に標記についてのアンケート調査を実施いたしました。

この程、その調査結果がまとまりましたのでご報告いたします。

- がん告知の希望 (P 2)
- 余命が限られている場合、自宅で過ごしたい人の割合 (P 3)
- 人生の最終段階に自身の予後を知りたいか (P 4)
- 人生の最終段階で受けたい治療 (P 5)
- 人生の最終段階に受ける治療の意思決定を委ねたい相手 (P 6)
- 理想の死に方 (P 7~8)
- 配偶者とどちらが先に死にたいか (P 9)
- パートナーが先に死んだ場合、心配なこと (P 10)
- あの世はあるか (P 11)
- 死に直面したとき、宗教は心の支えになるか (P 12)

【コメント】

今回の調査で明らかになった興味深いこと (P 13)

＜お問い合わせ先＞

(公財) 日本ホスピス・緩和ケア研究振興財団

TEL. 06-6375-7255

FAX. 06-6375-7245

E-Mail. hospat@gol.com

【ホームページ】<http://www.hospat.org/>

《調査の実施概要》

1. 調査地域と対象 全国の20歳から79歳までの男女
2. サンプル数 1000人
3. サンプル抽出 クロスマーケティング社のモニター
4. 調査方法 インターネット調査
5. 実施時期 2017年12月12日から12月15日

6. 回答者の属性

(単位：人)

性×年代の人口構成比に合わせたサンプル数をとった。

	20代	30代	40代	50代	60代	70代	合計
男性	67	84	99	82	94	68	494
女性	65	82	97	83	99	80	506
合計	132	166	196	165	193	148	1000

7. 調査機関 第一生命経済研究所

はじめに

この度、「ホスピス・緩和ケアに関する意識調査 2018 年」を公表する運びとなりました。

前回の調査（2012 年）から 6 年が経過し、ホスピス・緩和ケアを取り巻く環境も変化しつつあります。今回の調査を通して、過去の調査との比較にとどまらず、高齢化、多死社会が抱える課題に関しても重要な知見が得られるのではないかと考えております。

当財団は、ホスピス・緩和ケアに関する調査・研究や従事者人材育成を行うことにより、ホスピス・緩和ケアの質の向上に寄与することを目的として設立され、活動しています。同時に、社会からの理解や評価、期待を大切にする姿勢も重視し、ホスピス・ボランティアの支援活動、一般市民を対象としたフォーラム、また、さまざまな媒体を通しての情報提供活動を行ってきました。本調査は、ホスピス・緩和ケアに関する、社会における客観的な事実を確認し公表するという情報提供活動および調査結果の解析により、当財団の方向が正され、より貢献度の高い成果を達成することを目的として継続的に実施してまいりました。

本調査は、当財団事業委員会で企画され、事業委員の志真泰夫氏、小谷みどり氏、関西学院大学坂口幸弘氏、および名古屋大学佐藤一樹氏の 4 名から成る実行委員会が、第一生命経済研究所の協力を得て完成したものです。

今回の調査では、過去の調査を継続し比較するという基本的事項に加えて、人生の最終段階で受たい治療や、その意思決定をだれが行うかなど、現在終末期医療の課題となっている事項も調査項目に加えられました。さらに配偶者など大切な人との死別と悲嘆に関する調査項目も加えられ、時機に合った調査になったのでは、と考えております。

本調査が目的に合ったものになっているかどうかは、皆様の評価を待つのみですが、それらの建設的意見を踏まえて今後も、この意識調査をより充実した、意義深いものに高めていきたいと願っております。ホスピス・緩和ケアの働きは、患者さんやご家族のためであることはもちろんですが、同時に現代社会の病理に対する癒しのメッセージを発信することもあると考えております。本調査結果の公表が、その発信の一助となることを願ってやみません。

2018 年 5 月

公益財団法人
日本ホスピス・緩和ケア研究振興財団
理事長 柏木 哲夫

がん告知の希望

がんにかかったとしたら、「治る見込みがあってもなくても、知りたい人」は62.9%。しかし、家族ががんにかかった場合は、患者本人の意向に従う人が多い

図1 がんにかかったら、事実を知りたいか

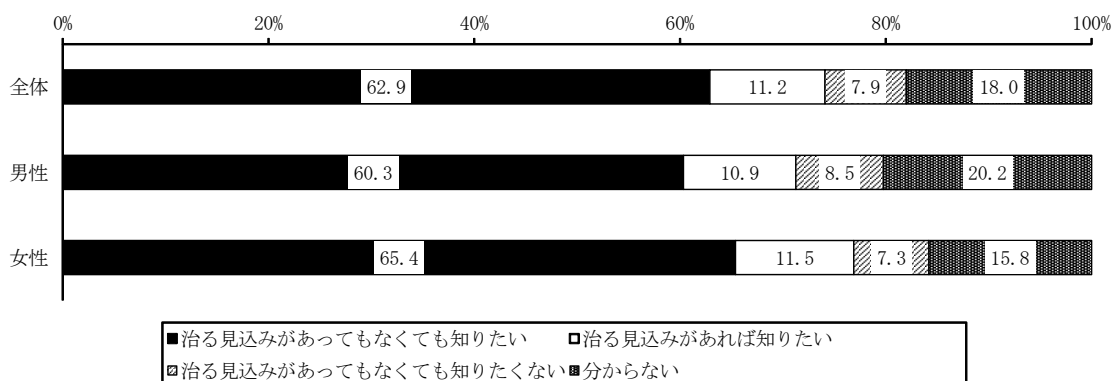
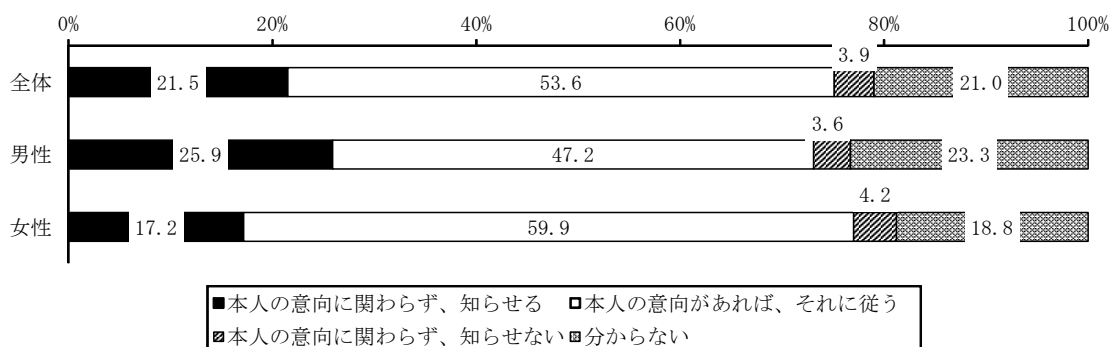


図2 家族ががんにかかったら、事実を知らせるか

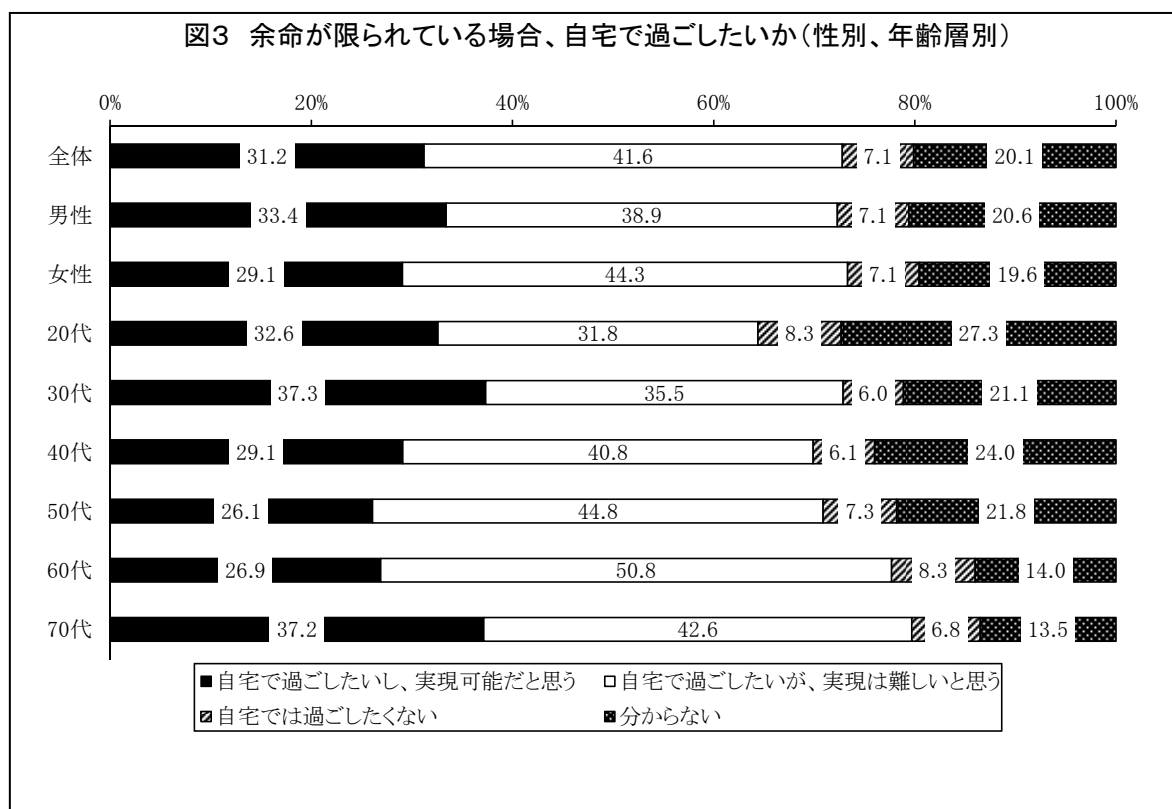


「もしあなたががんにかかったとしたら、その事実を知りたいですか」という設問に対しては、全体の62.9%が「治る見込みがあってもなくても、知りたい」と回答し、「治る見込みがあれば知りたい」(11.2%)を大きく上回った。また過去の調査と比較すると、「治る見込みがあってもなくても、知りたい」と回答した人は、2006年調査70.9%→2008年調査72.1%→2011年調査74.9%と微増していたものの、今回の調査では62.9%と減少している。

また「もしあなたのご家族ががんにかかったとしたら、その事実を知らせますか」とたずねると、「本人の意向があれば、それに従う」と回答した人が53.6%と最も多く、「本人の意向に関わらず、知らせる」と回答した人(21.5%)を大きく上回った。過去の調査と比較すると、「本人の意向に関わらず、知らせる」人は2006年調査11.9%→2008年調査13.1%→2011年調査16.3%→今回調査21.5%と増加している。

余命が限られている場合、自宅で過ごしたい人の割合

余命が1～2カ月に限られたら、「自宅で過ごしたい」人は7割以上、そして、それが「実現可能だと思う人」が徐々に増加している。



○「もしあなたががんで余命が1～2カ月に限られているようになったとしたら、自宅で最期を過ごしたいと思いますか」とたずねたところ、全体の7割以上の人が自宅で過ごしたいと答えた。一方、「自宅で過ごしたいが、実現は難しいと思う」と回答した人が41.6%、「自宅で過ごしたいし、実現可能だと思う」と回答した人の31.2%を上回った。

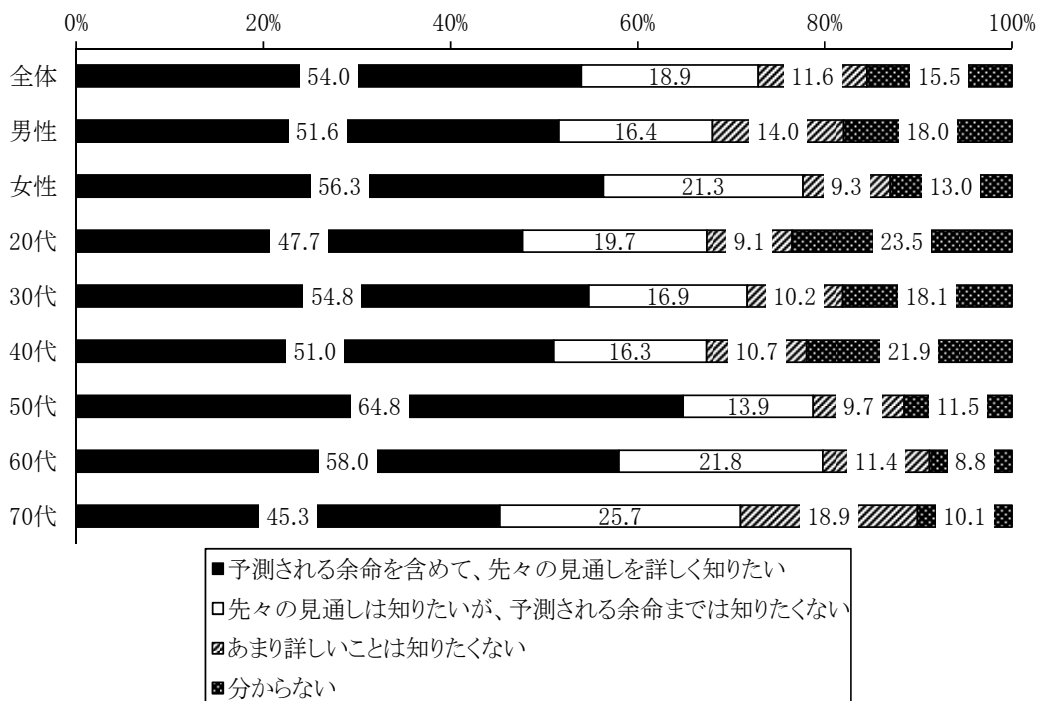
○性別で見ると、自宅で過ごしたいと思っている人は男性で72.3%、女性で73.4%と性別を問わず多いが、男性では「自宅で過ごしたいが、実現は難しいと思う」人38.9%と「自宅で過ごしたいし、実現可能だと思う」人33.4%とほぼ二分されているのに対し、女性では「自宅で過ごしたいが、実現は難しいと思う」人44.3%が、「自宅で過ごしたいし、実現可能だと思う」人29.1%を15ポイントも上回っていた。

○2006年調査、2008年調査、2012年調査と比較すると、「自宅で過ごしたいが、実現は難しいと思う」と回答した人が、63.3%→61.5%→63.1%→41.6%と大幅に減少し、「自宅で過ごしたいし、実現可能だと思う」と考える人が増加していた。これは、在宅医療に対する理解が進んできており、自宅で最後まで過ごすことができることを知っている人が少しずつ増えている現状を示している。

人生の最終段階に先々の見通しを知りたいか

過半数の人が「先々の見通しを詳しく知りたい」と回答した。一方、「予測される余命までは知りたくない」、「あまり詳しいことは知りたくない」と回答した人の割合も3割あった。

図4 先々の見通しを知りたいか(性別、年齢層別)

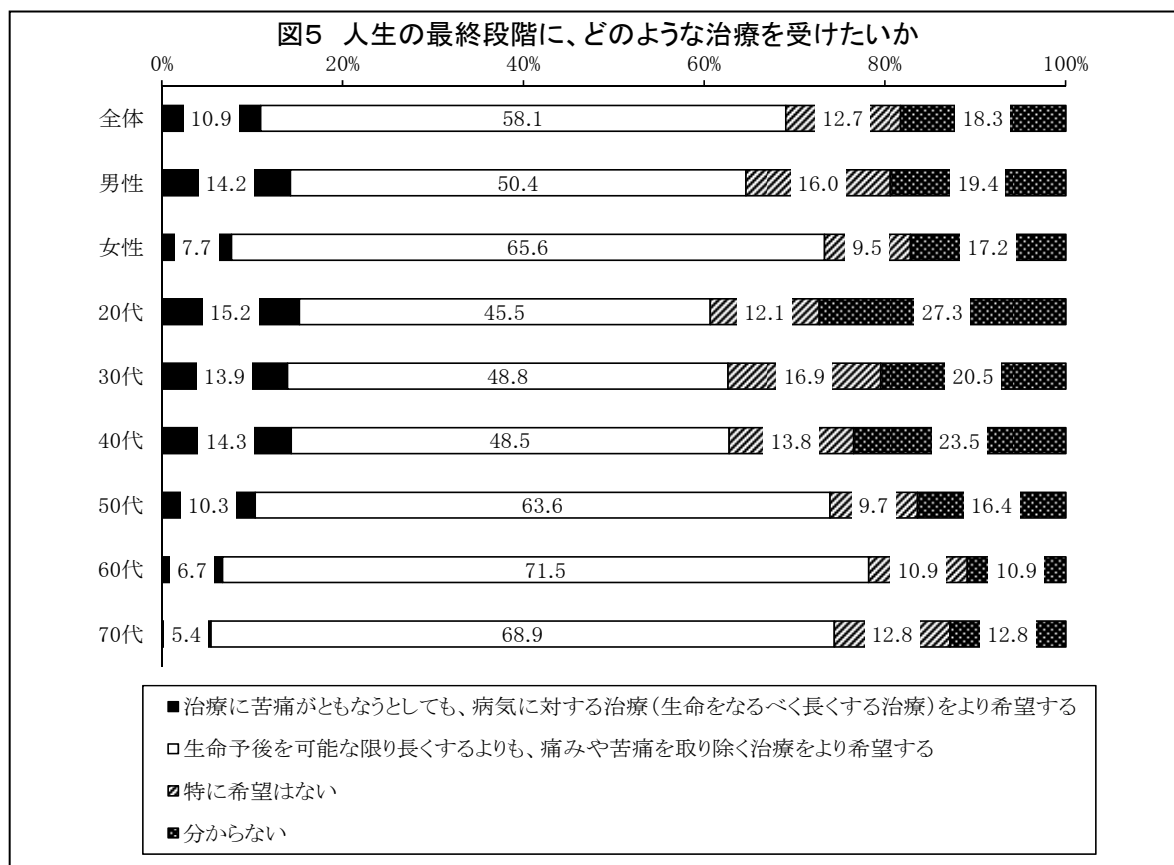


○「人生の最終段階に、あなたは先々の見通し(余命や治癒が難しいこと)を知りたいですか」とたずねたところ、「予測される余命を含めて、先々の見通しを詳しく知りたい」という回答が54.0%と過半数を占めたが、「先々の見通しは知りたいが、予測される余命までは知りたくない」18.9%、「あまり詳しいことは知りたくない」11.6%と回答した人も合わせて30.5%あった。

○「末期のがん、もしくは重い病気により、治る見込みがなく、死が近い」人生の最終段階での病状説明の希望には個人差があり、また状況により変化するものであり、医療者が予後伝える際には患者が「何を知りたいか」「どこまで知りたいか」について配慮する必要性が示唆された。

人生の最終段階で受けない治療

生命をなるべく長くする延命治療より、痛みや苦痛を取り除く緩和治療を多くの人が希望していたが、意見が定まっていなかった人も3割あった。



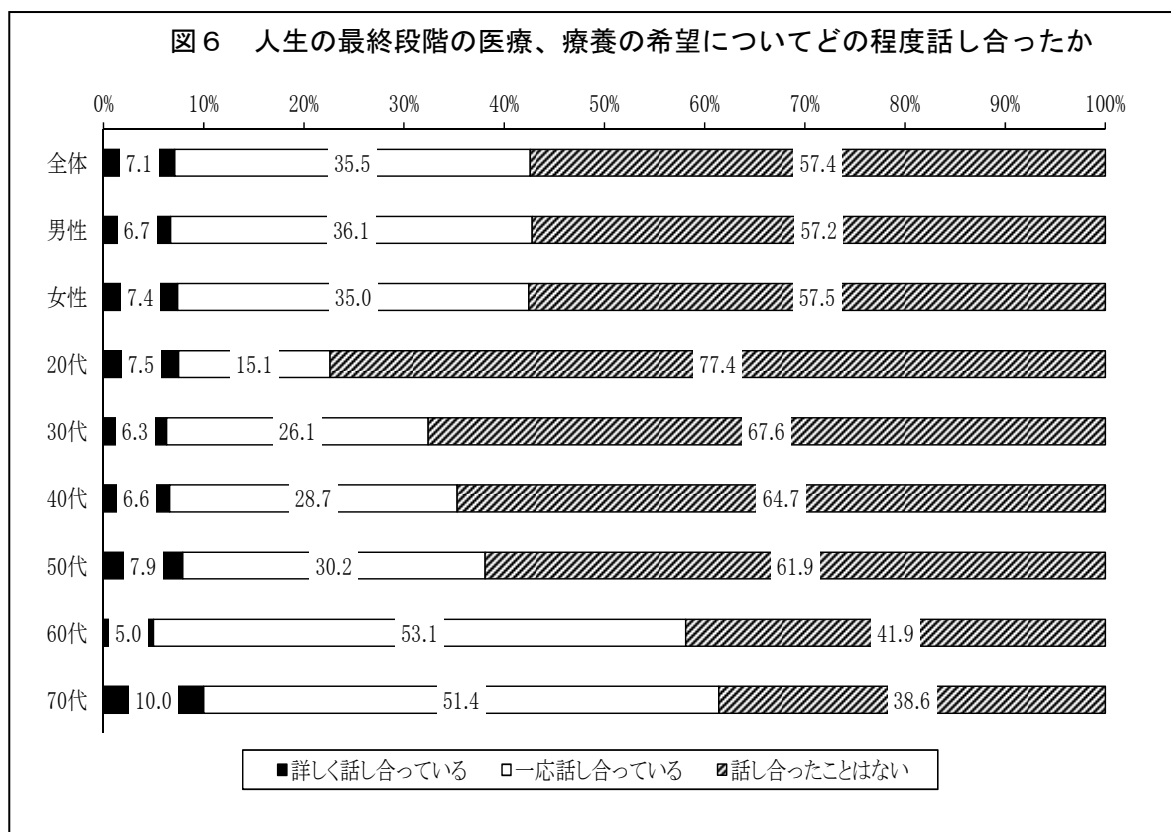
○「人生の最終段階に、あなたはどのような治療を受けたいですか」とたずねたところ、「治療に苦痛が伴うとしても、病気に対する治療(生命をなるべく長くする治療)をより希望する」という回答をした人が10.9%であるのに対して、「生命予後可能な限り長くするよりも、痛みや苦痛を取り除く治療をより希望する」という回答をした人は58.1%であった。延命のための治療より苦痛を緩和する治療を多くの人が希望していた。

○一方、「特に希望はない」12.7%、「分からない」18.3%と回答した人もあわせて3割あった。

○人生の最終段階に延命治療より緩和治療を希望する意見が多数派であるが、意見の定まっていなかった人もあり、一度ではなく何度も繰り返し話し合う機会を持つ必要性が示唆された。

人生の最終段階に受ける治療の意思決定を 委ねたい相手(代理意志決定者)と話し合ったか

代理意思決定者と「話し合ったことはない」という回答が6割で、また、代理意思決定者と話し合ったことがあると回答した4割のうち、「詳しく話し合っている」人は7.1%に過ぎなかった。

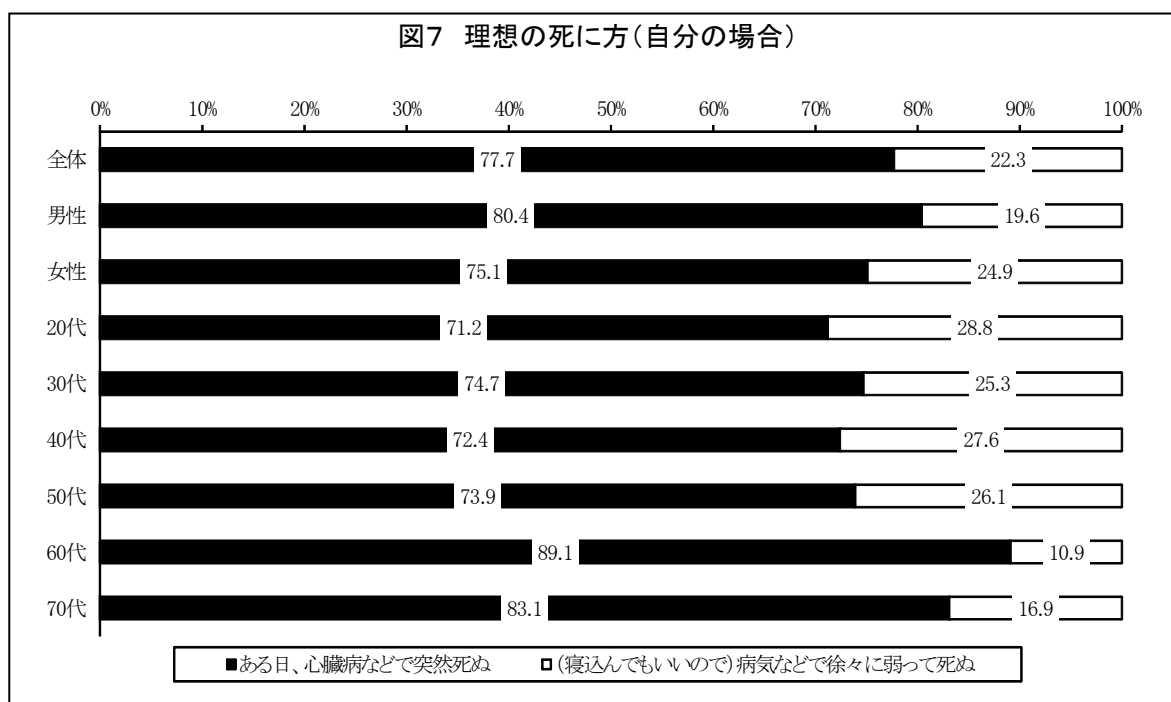


○人生の最終段階では、重篤な病状のために自ら意思決定することが難しい場合も多くある。そのような場合に、「あなたが意思決定できなくなったときに、あなたの代わりに医療・療養について決めてほしいと思う人(代理意思決定者)はどなたですか」という問に対して、代理意思決定者としては、配偶者が最も多かった。

○代理意思決定者がいると回答した873人に対して、「その方(代理意思決定者)と、あなたの人生の最終段階の医療・療養の希望についてどの程度話し合ったことがありますか」という問に対して、代理意思決定者と詳しく話し合っている人は1割以下であり、今後、人生の最終段階について配偶者や身近な人と話し合いの機会を持つためには、医療従事者の支援のあり方を含めて、環境の整備等が必要なことが示唆された。

理想の死に方 — “ぽっくり死”か“ゆっくり死”か 自分の場合

“ぽっくり死”願望のある人は、7割を超える



○自分で死に方を決められるとしたら、いわゆる「ぽっくり死」と「ゆっくり死」のどちらが理想だと思うかをたずねたところ、「ある日、心臓病などで突然死ぬ」（「ぽっくり死」）が 77.7%、「（寝込んでもいいので）病気などで徐々に弱って死ぬ」（「ゆっくり死」）が 22.3%となった。

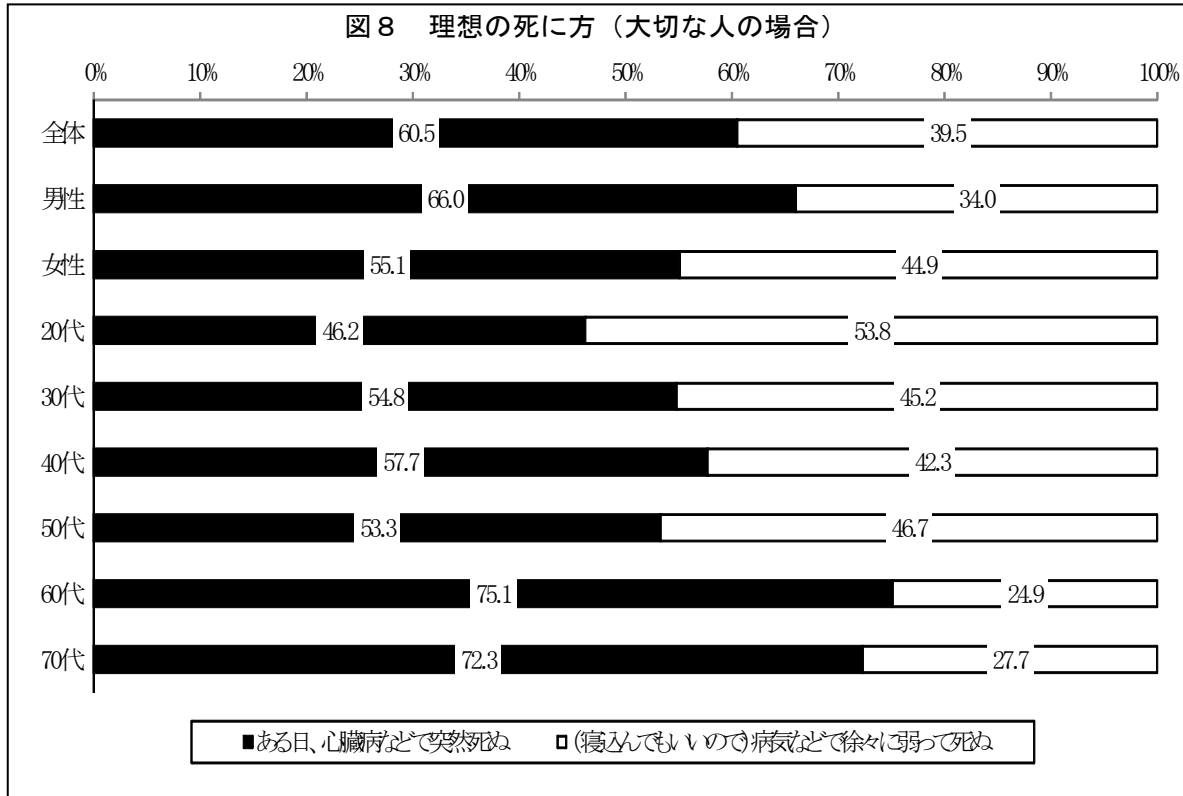
○「ぽっくり死」が理想だと回答した人の割合は、過去の調査結果と比較すると、2008年調査 73.9%→2012年調査 70.9%→今回調査 77.7%となり、今回の調査結果が最も高かった。

○性別で比較すると、「ぽっくり死」が理想だと考える人は男性の方がやや多いが、特筆すべきほどではない。

○年齢層別に比較すると、総じてどの年代でも「ぽっくり死」願望が強いが、60代、70代では8割を超えており、高齢者ほど「ぽっくり死」願望が多いことが明らかとなった。

理想の死に方 — “ぽっくり死”か“ゆっくり死”か 大切な人の場合

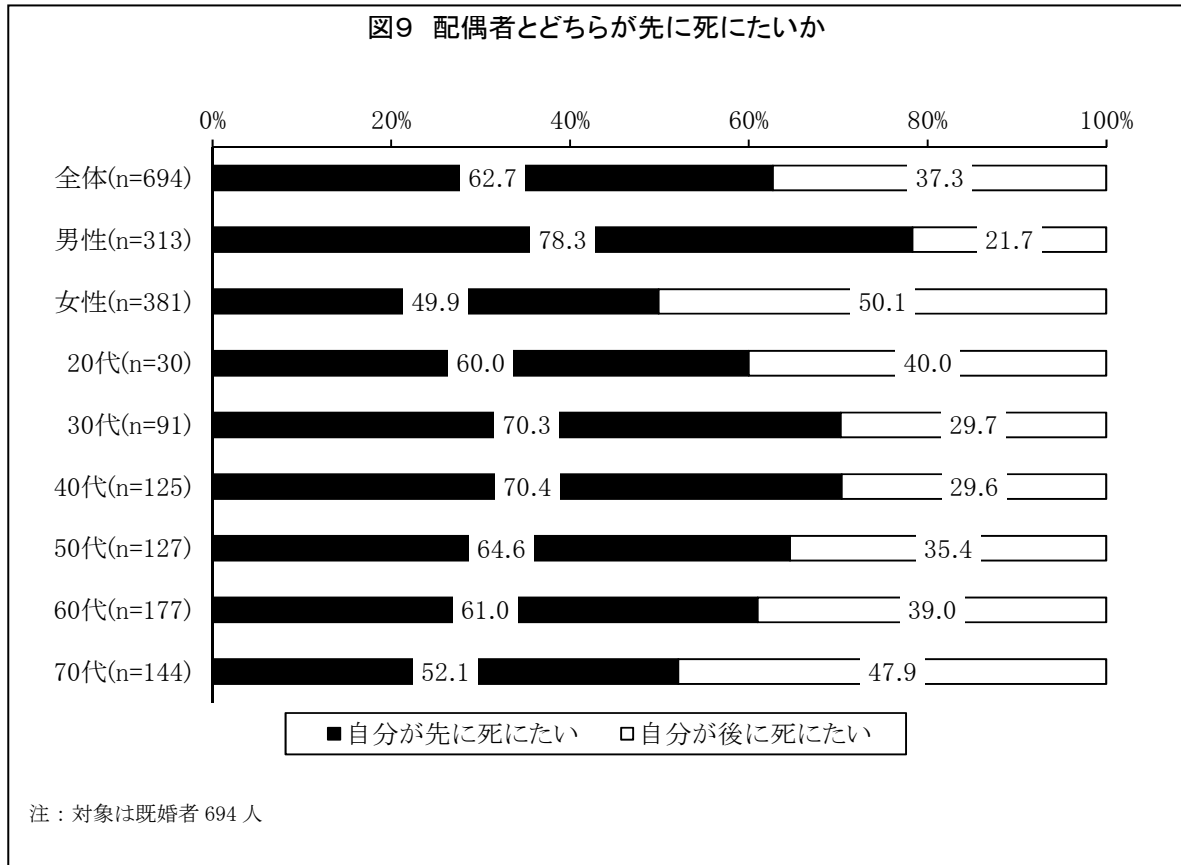
大切な人に、“ぽっくり死”を選んで欲しい人は6割であった。



- 「大切な人がその人自身の死に方を決められるとしたら、あなたは、どちらを選んで欲しいと思いますか」とたずねたところ、「ぽっくり死」と回答した人が60.5%となった。
- その理由として「ぽっくり死」を回答した人では「苦しんでほしくないから」が83.5%と突出して多く、次いで「痛みを感じてほしくないから」が50.2%と半数に達した。一方、自分がぽっくり死にたい場合の理由として上位に挙げた「家族に迷惑をかけたくないから」は26.0%と少なかった。
- 性別で見ると、大切な人の「ぽっくり死」を望む人は、男性では66.0%いるのに対し、女性では55.1%と10ポイント以上の開きがあった。
- 年齢層別では、60代、70代では大切な人の「ぽっくり死」を望む人が7割を超えていたが、若い世代では「ゆっくり死」と「ぽっくり死」がほぼ2分され、20代では「ぽっくり死」の方が少なかった。

配偶者とどちらが先に死にたいか

既婚男性の78.3%が、「自分が先に死にたい」と回答。
既婚女性では意見が半々に分かれる。



○既婚者に、自分で死の時期を決められるとしたら、「配偶者より先に死にたいか」、「後に死にたいか」をたずねたところ、「自分が先に死にたい」と回答した人が全体で62.7%、「自分が後に死にたい」と回答した人37.3%を上回った。

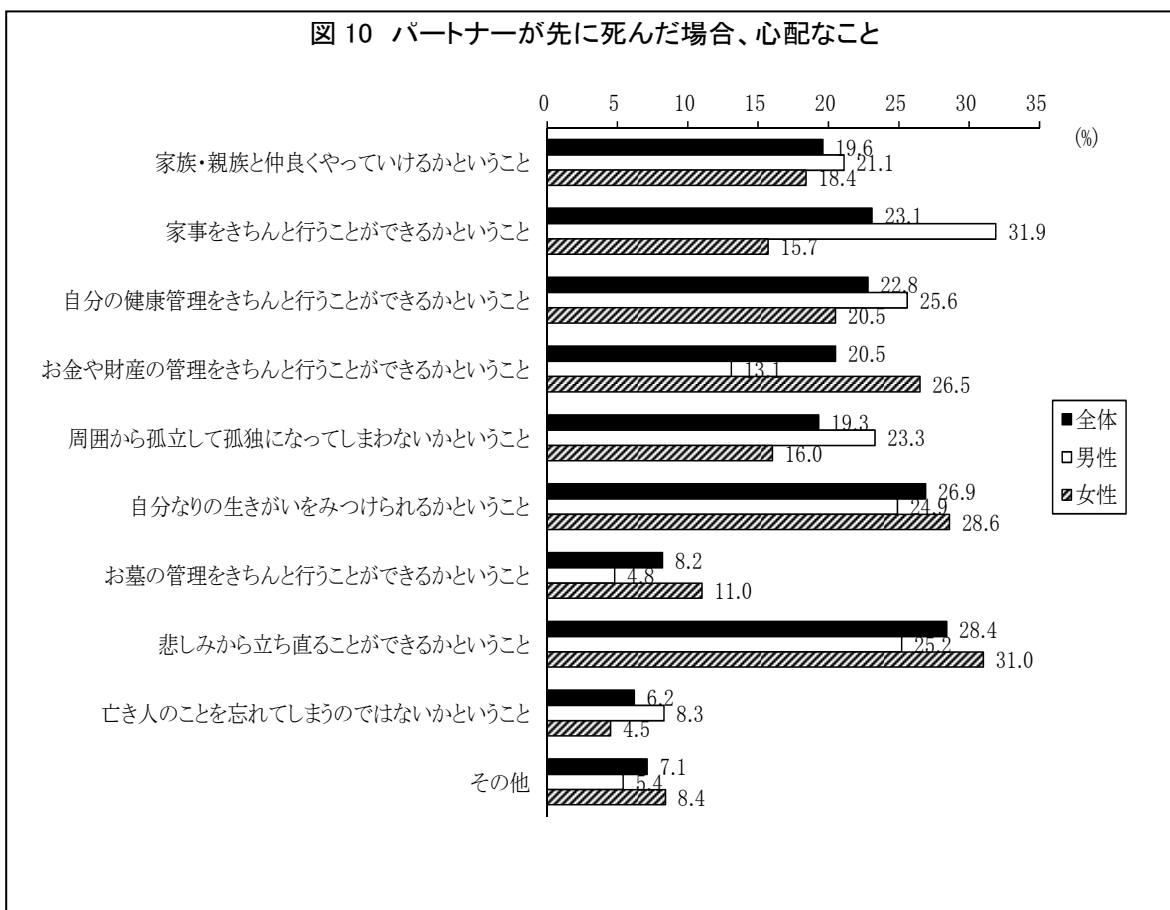
○性別で見ると、男性では「自分が先に死にたい」人が78.3%なのに対し、女性では49.9%と半数しかおらず、大きな差がみられた。

○男性の8割が先に死にたいと考えていたのに対し、女性は半数にとどまった理由としては、「パートナーを失う悲しみに耐えられないから」、「自分が死ぬときにパートナーがそばにいて欲しいから」などの理由が多く、男性にその傾向が強いといえる。

パートナーが先に死んだ場合、心配なこと

「悲しみから立ち直ることができるかということ」が28.4%で最も多い。
男性では妻に先立たれると、日常生活や健康管理の不安が大きい。

図10 パートナーが先に死んだ場合、心配なこと



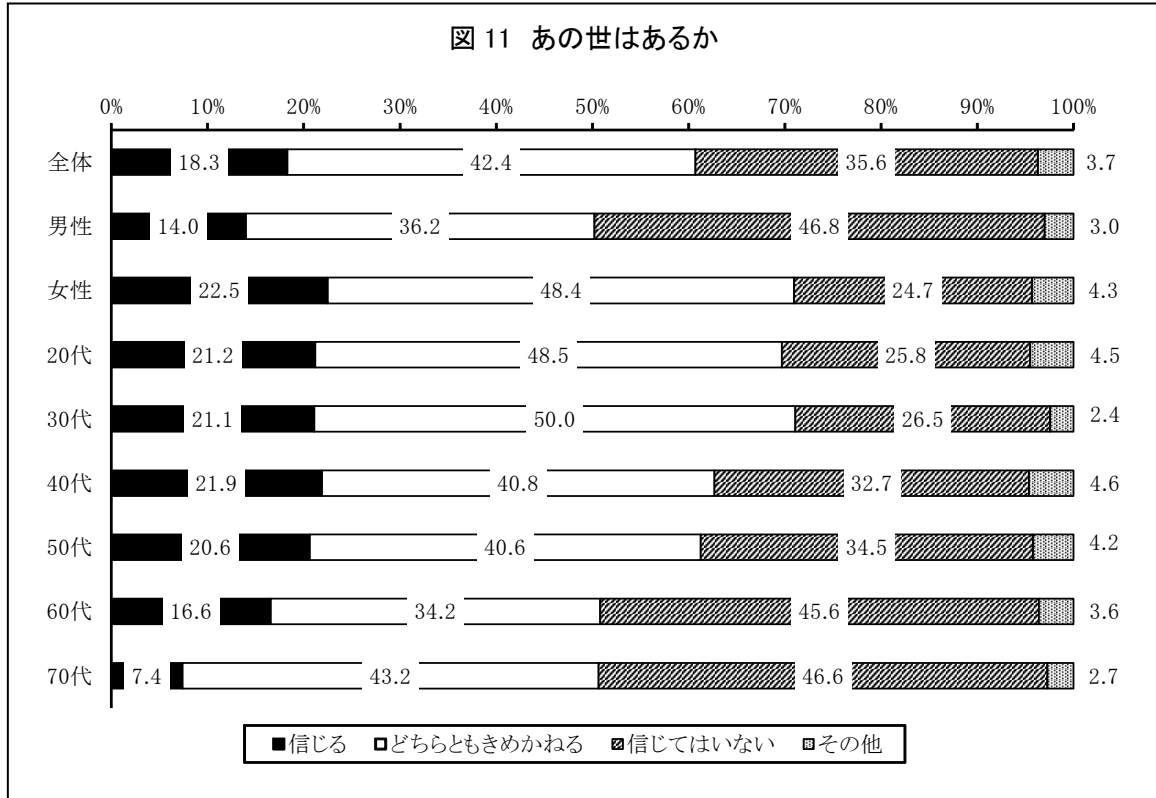
○夫や妻などパートナーが先に死んだ場合、どんなことが心配に思うかを複数回答で答えてもらったところ、最も多かった理由として挙げたのは「悲しみから立ち直ることができるかということ」28.4%であった。

○性別でみると、男性で最も多かったのは「家事をきちんと行うことができるかということ」(31.9%)であった。次いで「自分の健康管理をきちんと行うことができるかということ」(25.6%)で、男性の場合、パートナーが先に死んだときの心配として、家事や健康管理を女性よりも多く挙げており、男性は妻に先立たれると、自分の日常生活が立ち行かなくなることへの不安が大きいことが示唆された。

○実際に配偶者と死別した人(31人)に、死別した後、難しく感じたことを挙げてもらったところ、最も多かったのは「自分なりの生きがいを見つけること」(35.5%)で、次いで「悲しみから立ち直ること」(29.0%)であった。

あの世はあるか

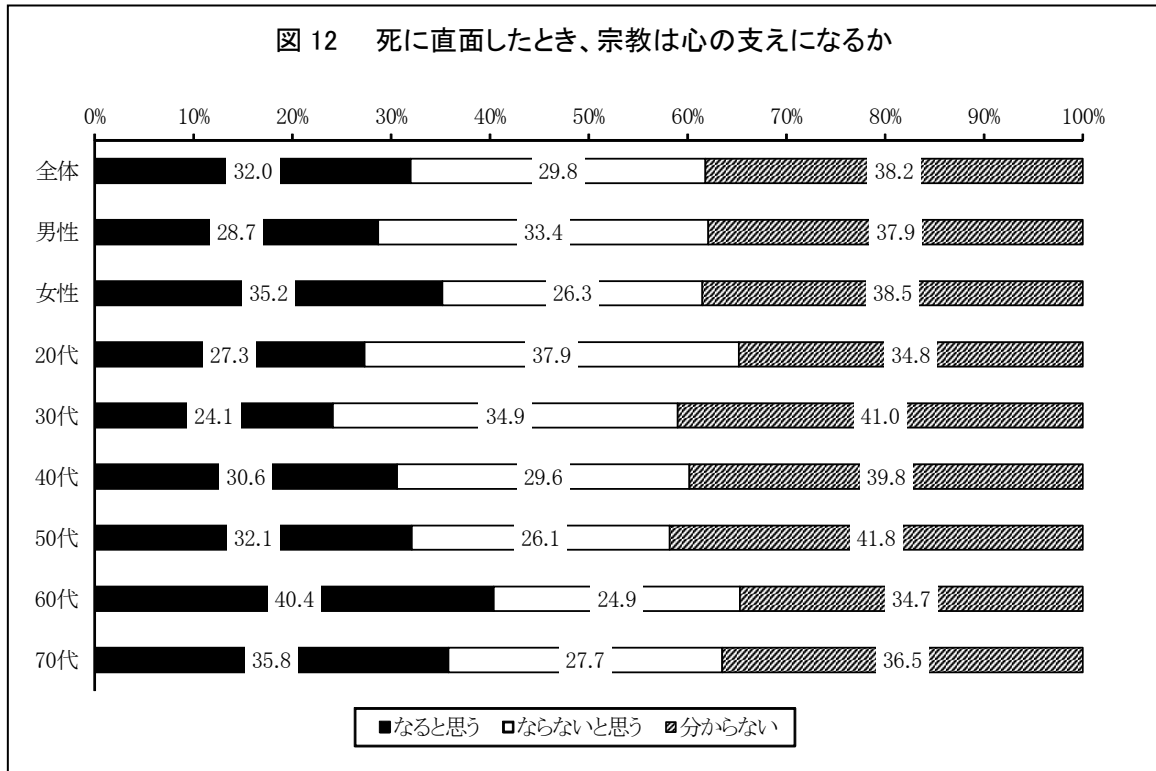
「どちらともきめかねる」人が 42.4%で最も多い。
 高齢になると、あの世を信じない人が増加する。



- あなたは「あの世」というものを信じていますかとたずねたところ、最も多かったのは「どちらともきめかねる」(42.4%)で、「信じてはいない」(35.6%)を上回った。
- 性別でみると、「信じてはいない」と回答した人は男性で46.8%と半数近くいるが、女性では24.7%にとどまった。年齢層別では、50代以下では「どちらともきめかねる」と回答した人が多いが、60代以上では「信じてはいない」人が半数近くもおり、年齢が高くなるほど、あの世の存在を信じない人が増える傾向がある。
- 全体的にみれば、「あの世はあるかないか」という判断ではなく、どちらともきめかねるという曖昧な感覚を多くの人が持っている様子が見えてくる。

死に直面したとき、宗教は心の支えになるか

死に直面すれば宗教は心の支えになると思う人は、
2012年調査から大幅に減少した。



- 「信仰する宗教があるということは、死に直面したときに心の支えになると思いますか」とたずねたところ、「分からない」という回答が38.2%と最も多かったが、「なると思う」(32.0%)と「ならないと思う」(29.8%)がほぼ二分された。
- 前回調査と比較すると、「心の支えになると思う」とする人の割合は2008年調査39.8%→2012年調査54.8%→今回調査32.0%と、全3回のなかで最も少なかった。
- 2012年調査のときには東日本大震災の直後であったため、一時的に宗教への期待があり、「心の支えになると思う」とする人の割合が増加したと思われるが、7年近くが経過して、10年前の2008年調査の水準に戻ったとみることができるかもしれない。

今回の調査で明らかになった興味深いこと

1. 人生の最終段階で希望する治療

末期のがんや重い病気により、治る見込みがなく死が近い場合、人生の最終段階で希望する治療は、延命のための治療より、苦痛を緩和する治療を多くの人が希望しました。この傾向は年齢が高くなるほど強くなります。しかし、家族などと人生の最終段階について詳しく話し合っている人は1割であり、一方、「特に希望はない」、「分からない」と回答した人もあわせて3割ありました。人生の最終段階では、延命治療より緩和治療を希望する意見が多数派ではありますが、意見の定まっていない人もあり、一度ではなく何度も繰り返し話し合う機会を持つ必要性が示唆されました。これらのことから、人生の最終段階において、希望する治療について、パートナーや身近な人と話し合う習慣を持つことが必要であることが示唆されました。

2. 理想の死に方、自分の場合と大切な人の場合

自分で死に方を決められるとしたら、「ある日、心臓病などで突然死ぬ（ぽっくり死）」を選ぶ人が8割、「病気などで徐々に弱って死ぬ（ゆっくり死）」を選ぶ人が2割でした。「ぽっくり死」を選んだ理由では、「苦しみたくないから」、「家族に迷惑をかけたくない」という2つの思いが強く、「ゆっくり死」を選んだ理由では、「死のころづもりをしたいから」が挙げられました。また、大切な人の場合は、少しでも長生きしてほしいということから、「ゆっくり死」を選ぶ人が6割となりました。

3. 配偶者より先に死にたいか、後の方がいいか。

既婚者の3人に2人が、「自分が先に死にたい」と考えていました。明確な男女差が認められ、男性の8割に対し、女性は5割にとどまっていました。その理由を聞いたところ、「パートナーを失う悲しみに耐えられないから」、「自分が死ぬときにパートナーがそばにいて欲しいから」など、自己中心的とも思われる理由が多く、男性にその傾向が強いことが分かりました。一方、「自分が後に死にたい」人の理由をみると、「パートナーの最期を看取ってあげたいから」、「パートナーの生活が心配だから」が半数となりパートナーへの配慮の気持ちが伺えました。また、配偶者との死別後の困難を聞いたところ、「自分なりの生きがいを見つけられるか」、「悲しみから立ち直ることができるか」を挙げた人が多く、配偶者を失った後の生き方が大きな課題となっていることが示されました。

4. あの世はあるか

「あなたは『あの世』というものを、信じていますか」とたずねたところ、最も多かったのは「どちらともきめかねる」(42.4%)で、「信じてはいない」(35.6%)を上回りました。

性別では、「信じてはいない」と回答した人は男性で46.8%と半数近くですが、女性では24.7%にとどまりました。年齢層別では、年齢が高くなるほど、あの世の存在を信じない人が増える傾向にあり、全体的にみれば、あの世はあるかないかという判断ではなく、どちらともきめかねるという曖昧な感覚を多くの人が持っている様子がうかがえます。

